

陳舜臣さんを語る会通信

NO.88

Nov. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年11月10日

未紹介作品が残る推理中短編集『方壺園』、『青玉獅子香炉』

このところ、推理小説ばかり取り上げてきました。長篇22冊、中短編集21冊、連作集5冊、合計48冊です。おそらく、これで、陳舜臣さんの推理小説すべてにふれたことになると思います。ただ、中短編集については、収録作品の一部を紹介しただけで、紹介し残しているというものが4冊あります。『方壺園』『青玉獅子香炉』『崩れた直線』『神獣の爪』です。これを本号と次号に分けて2冊ずつ取り上げたいと思います。(編集委員 橘雄三)

ちくま文庫版『方壺園』「解説」

より抜粋転載

小見出し、傍線は編集委員の加筆

新しい世代の書き手が大挙登場

昭和三十年代前半、国産ミステリはそれまでの呼び名「探偵小説」から「推理小説」へ移行するとともに質的な変化を迎えた。その変化は、新しい世代の書き手たちが大挙して登場したことで、必然的にもたらされたといっていだろう。

松本清張の人氣に伴う推理小説ブームや、江戸川乱歩賞が長篇公募の新人賞に改められたことなど、いくつかの要因が考えられるが、この時期に登場してきた有力な新人たちが昭和後期のミステリ界を支えたことは間違いない。一九五六年以降にデビューした作家の最初のミステリ単行本を並べると、このようになる。

五六年 松本清張『顔』

五七年 仁木悦子『猫は知っていた』

五八年 多岐川恭『氷柱』

大藪春彦『野獣死すべし』

五九年 佐野洋『一本の鉛』

高城高『微かなる吊鐘』

戸板康二『車引殺人事件』

水上勉『霧と影』

樹下太郎『最後の人』

結城昌治『ひげのある男たち』

六〇年 笹沢佐保『招かざる客』

河野典生『陽光の下、若者は死ぬ』

三好徹『光と影』

六一年 都筑道夫『やぶにらみの時計』

海渡英祐『極東特派員』

陳舜臣『枯草の根』

六二年 戸川昌子『大いなる幻影』

六三年 小泉喜美子『弁護側の証人』

六四年 西村京太郎『四つの終止符』

生島治郎『傷痕の街』

「三冠王」陳舜臣

この中で、当時、ミステリ作家の取ることの出来た大きな文学賞、江戸川乱歩賞、日本推理作家協会賞、直木賞のすべてを取っているのは陳舜臣ただ一人である。いわゆる「三冠王」は長い間、陳舜臣しかいなかった。九二年に高橋克彦、九九年に桐野夏生、二〇〇六年に東野圭吾が達成しているが、まだ歴代で四人しかいないのである。

デビュー当時から、そして「大家」となつてからも、かわらず推理小説に愛着

六七年に三千枚の歴史大作『阿片戦争』を刊行してからは中国歴史ものの比重が多くなつていくが、七〇年代までは現代ミステリもコンスタントに書かれている。

ブームに乗って推理小説をデビューの足がかりとし、作家になった後は他のジャンルへと移っていく作家も見受けられたが、陳舜臣は『残系の曲』『秘本三国志』『小説十八史略』『江は流れず』『太平天国』などを次々と刊行して歴史小説の大家となつてからも、ミステリへの愛着をこたへることに示している。

例えば新保博久氏は『紅蓮亭の狂女』

徳間文庫版の解説で、講談社版の『陳舜臣全集』が、当初は歴史ものだけを対象とする企画だったため、著者が「ミステリは入れてもらえないんですか」と寂しうにしていた、という逸話を披露している。

「獣心図」は「懸賞付犯人探し」企画

「獣心図」は掲載誌の「懸賞付犯人探し」企画として発表された。賞金は一万円および一年間本誌贈呈だったが、「犯行経過」「犯人氏名」「犯行動機」の三つをすべて当てなければならず、なかなかの難問であった。

本篇の第六節が始まってすぐ、「なんと、うかつ者だろう！」までが「問題篇」、読者に十分気をもたせておいてから以降が「解決篇」として掲載されている。結果発表によると完全な正解者はなかったが、もつとも近かった二名が入選、や惜しかった四名が残念賞に選ばれている。残念賞の四人の中にSF作家の戸倉正三の名前が見えるのが面白い。

二〇一八年 日下三蔵



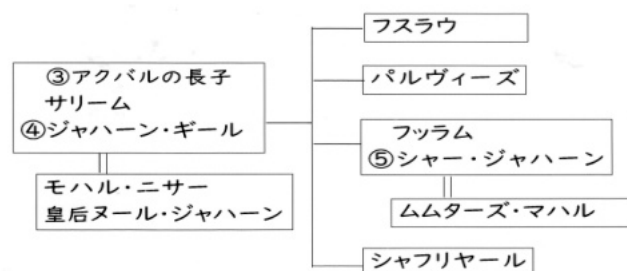
ちくま文庫版表紙

『方壺園』各編紹介

方壺園	初出は『小説中央公論』昭和37年7月号。本通信No.53で既に紹介
大南宮 『小説中央公論』 昭和37年1月号	舞台は日清戦争中の遼東、荒涼たる沙原に浮んだ台地に、二万の兵を収容するために設けられた清軍の営舎、大南宮。しかし、兵の大半が朝鮮へ出征し、営舎は閑散としている。ストーリーは、大南宮の将校・顔基が営舎に招いたかつての上司・王界を迎えに行く場面から始まる。顔基は、武科合格の同期で、大南宮で同じく将校の劉応東の性格・態度にいちいちいらだち神経衰弱になっている。王界を大南宮に招いたのも、かつて、盛京の営で二人の上司であった王界に取りなしを頼むためであった。そして、王界の大南宮滞在中に劉応東が殺されるという事件が起きる
九雷溪	初出は『小説中央公論』昭和37年10月号。本通信No.14で既に紹介
梨花の花 『宝石』 昭和37年10月号	題名は武器、「梨花槍」からきている。登場人物●浅野富太郎：N大学の文化史研究所に勤める。●坂谷芙美子：浅野の恩師、坂谷博士の娘。浅野の婚約者。●川越義一：浅野と同じく坂谷博士の門下生。彼も芙美子に惹かれている。●中田祐作：大学食堂の主人。早くに妻を亡くし、男手一つで娘を育てた。「倭寇史」のアマチュア研究家。●中田初子：中田祐作の娘。食堂を手伝っている。■ストーリーは、研究所の一室で何者かに襲われ大けがをして入院中の浅野を、芙美子が見舞うところから始まる
アルバムより 『文芸朝日』 昭和37年10月号	登場人物●「私」：鄭清群の借家に住む中国人。鄭清群とは、20数年来の知り合い。●鄭清群：女中から「若旦那」と呼ばれているが、50歳を越えている。6歳の時、父親が殺される場に遭遇し、暗殺者の容貌をしっかりと覚えているという。●阿鳳：鄭清群に仕える老女中、70歳に近い。■この作品の舞台・作中時間は、①鄭清群が死ぬ1962年？の神戸、②青年政治家鄭清群が、日中の戦争を早く終わらせる下交渉のために来神した徐州会戦直後の1938年初夏、③父が暗殺された鄭清群6歳の天津、の三つである。この②の時、宿舍で、鄭の日本人護衛が殺されるという事件がおきる。この出来事以来、鄭清群は物を言うことも、笑うこと、泣くこと、…、感情を表わすこともできなくなっていた。
獣心図 『宝石』 昭和37年1、3月号	陳舜臣さんは『宝石』昭和38年9月号「自作を語る」で「獣心図」について、「インドのムガル王朝の歴史からとった。史実八割、フィクション二割。むかし勉強した題材で、私の好きな作品の一つ」とおっしゃっている。1622年、ムガル朝第4代皇帝ジャハーン・ギールの盲目の長子フスラウが死んだ。弟フッラムの手の者によって殺されたとするのがもっぱらであるが、真相は闇。陳舜臣さんが言うフィクション2割の部分である。フッラムだけでなく、宮廷の住人誰もが、帝位をめぐる争いに巻きこまれ、心は獣に近くなる。ここに一人の女性が大きくストーリーに絡む。零落して故郷を出たペルシャ貴族がムガル朝の下級官吏として職を得る。その娘モハル・ニサーはたぐいまれな美貌の女性に成長、未亡人から、第4代皇帝ジャハーン・ギールの皇后ヌール・ジャハーンとなるが…



ヌール・ジャハーン
ja.wikipedia.orgより



「獣心図」には関係する部分のムガル朝系図を作ってみました。ここに、ムムターズ・マハルという名が見えます。すぐ、タージ・マハル廟が思い浮かびます。系図にあるモハル・ニサーの兄の娘です。フッラム(⑤シャー・ジャハーン)は、「獣心図」では、権勢欲と嫉妬から兄フスラウに刺客を送る「獣のような心」を持つ存在として描かれています。しかし、『インド三国志』では、息子⑥アウラングゼーブに屈服、アグラ城に幽閉され、その窓からタージ・マハル廟を眺めながら死を迎える、いかにも人間的存在として描かれます。

「獣心図」補足

文春文庫版『青玉獅子香炉』足立巻一氏「解説」から

文春文庫版『青玉獅子香炉』
足立巻一氏「解説」より抜粋転載
小見出し、傍線は編集委員の加筆

『青玉獅子香炉』収録作品は
前期総仕上げの中・短編

陳さんは大正十三年に神戸市に生まれたから、直木賞を受けた年は四十五歳で、壮年の真盛りにあたる。

昭和三十六年に『枯草の根』で第7回江戸川乱歩賞を受けてから七年間が経過し、少なからぬ推理小説が書かれた。昭和四十五年に日本推理作家協会賞を受けた『玉嶺よふたたび』の原型「玉嶺第三峰」(昭42『オール讀物』)もすでに書かれていた。

た、この時期、作者は三部から成る大作『阿片戦争』(昭42 講談社)の執筆に全力を傾けていた。この大作に着手したのは昭和三十八年ごろであり、資料の渉獵と執筆とに寧日なかった。

まり、『青玉獅子香炉』一連の中・短編は『阿片戦争』の執筆中、あるいは完稿直後に発表された。そして、『阿片戦争』『玉嶺よふたたび』をもって作者の文学活動の前記を区切るとすれば、これらの作品は前期総仕上げの中・短編だということができる。

陳舜臣さんはスリラー好き

陳さんは平素しゃべるときは、

推理小説のことをスリラーという。また、いつか、なぜ推理小説を書くようになったのか?とたずねたら、スリラーが好きだから、とだけ答えた。作家はある作品に集中しているとき、たいていそれとは反対のようなものを書きたくなる、とはよくいわれることだ。スリラー

という知的遊戯の大好きな陳さんにしてみれば、重厚な歴史小説『阿片戦争』を書き進めながら、伏線をきめこまかく張りめぐらしたスリラーの短編を書きたいという内的欲求に、しばしば衝きあげられたような気がする。あれこれプロットを思い描いてもいただろう。さらに『阿片戦争』が完稿すると、いそいそとスリラーの世界にはいつていったことだろう。

そうして書かれたのが、「青玉獅子香炉」ほか四編であると思う。『阿片戦争』にくらべると軽やかではあり、スリラー好きの才質が生動している。

「青玉獅子香炉」は、一件の殺人事件がおこるわけでもないが、まぎれもなく推理小説、陳さんのことばでいえばスリラーである。(傍線1)

たぐさんの中国の人たちに養われ、守られ、支えられて来た陳さん

陳さんは、国籍は中国であるが、神戸生まれの神戸育ちで、小学校以来日本人の学校で学んだし、平素は中国人を感じさせることはほとんどない。正月には日本人以上にうまく和服を着こなして、酒を飲んだりする。また、日本の悪口をいったことは、一度も聞いたことがない。子どものときから日本人にいつしよに暮らしてきて、差別されたり意地悪されたりしたことは一度もないから、特別に日本人に悪感情を持ちようがない、ともいう。(傍線2)

それにもかかわらず、やはり陳さんはまぎれもない中国の大人だと思ふ。酒は強いが一度も酔態を見せず、信義に厚く、日常生活においても文学活動においても自分の歩調を乱すことはない。

直木賞受賞のお祝いにしかけて驚いたことがある。神戸オリエンタルホテルの大広間で催されたのだが、そこに身動きつかぬほど集まっていたのは華僑の人たちであった。日本人の影はまことに薄く、まして物書き連中となるとどこにいるのかさっぱりわからない。わたしも隅で小さくなり、最後まで主賓にお祝いをいう機会がなかった。『敦煌の旅』で大佛次郎賞を

受けたときは、兵庫県民会館で陳さん自身の記念講演があったが、直木賞のときと同様のおもむきであった。

その光景を見て、陳さんはやはりこういうたぐさんの中国の人たちに養われ、守られ、支えられて来て、その文学もまた同様であろうと痛感したことだった。

(傍線1)補足 ■中島河太郎氏(徳間文庫版『南十字星を埋める』『解説』)も、秋山駿氏(徳間文庫版『燃える水柱』『解説』)も、「青玉獅子香炉」を推理小説とは異なるジャンルに入れている。そのあたり、人それぞれであるからなんとも言えない。私(橘)は、本通信No58「陳舜臣 作品一覧」では、推理小説に分類した。

(傍線2)補足 ■そうとはいえない。例えば、小学生のころ、祖父に連れられてのぞいた植木市で、植木屋に怒鳴りつけられたはなし(『清雲の軸』『祖父』の章)など



文春文庫版表紙

『青玉獅子香炉』各編紹介

題 初出	『青玉獅子香炉』各編紹介 足立巻一氏「解説」より転載
年輪のない木 『小説現代』 同42年8月号	「年輪のない木」は裏切った妻と男とを殺してラワン材にはめこみ、日本までおくってくるという陰惨な結末である
太湖帰田石 『小説現代』 同41年4月号	「太湖帰田石」は伝えられる名石を打ち砕くと、亡母が殺した女の死体があらわれる。これも残酷なイメージである。それにもかかわらず、読後の印象はそれほど陰惨でも残酷でもない。それというのも筆致がのびのびとし、しかも大陸の嵐のように乾いているからであろう。少なくとも日本的深刻趣味はまったくない
小指を追う 『別冊小説現代』 同44年新春特大号	ことに「小指を追う」になると、その感じが強い。おそらく、兵庫県加古川市の鶴林寺で仏像の小指が盗まれた事件をヒントにして組み立てられたのであろうが、それに子ども誘拐事件をからませ、不良少女に「警察のおっさん、この人らも、仏さんを盗んだんっちゃう？」といわせ、最後には「おっさんが踏んでるわ。そんな大切なもん、踏んだりしたらあかんやないの」のセリフで笑わせる。例によって計算された伏線が巧みに張ってはいるが、小指盗難事件からこんな人を食ったスリラーを着想できるのも、その人がらの大らかさのゆえであろう
カールへの道 『別冊小説新潮』 第66号(昭和42年)	「カールへの道」はどんでん返しの連続でおもしろいが、ことに「ひげをはやした陽気な男」ソ連の著名な歴史学者ナザロフ教授の造出にも、「小指を追う」同様のことがいえる。それよりも驚くのは、旅行記だけで書いたというが、アフガニスタンの風土が軽やかに、しかも鮮やかに描かれていることだ。血が書かせた、という気がする。「湿り気のない人間の力のおそろしさを漠然とかんじていた」という一節があるが、陳さん自身、湿気のない人である。まったく、湿気のない人間こそ、おそろしい
青玉獅子香炉	初出は『別冊文藝春秋』第105号(昭和43年)。本通信No. 19で既に紹介



鶴林寺 仁王門

■「小指を追う」補足

■ 作品文中、寺の名が「鶴鳴寺」となっているのが、「小指を追う」が、後述する一九六三年の鶴林寺所蔵聖観音立像盗難事件をヒントにしていることは先ず間違いない。

兵庫県加古川市にある鶴林寺所蔵の「聖観音立像」は、別名「あいたた観音」といわれる。ネットで探すと、複数ヒットし、どれもほぼ左のようなコメントがついている。

かつては全身を金で覆われていたために、この聖観音を見た盗賊はすっかりこれを金でできているものと思い、盗み出した。そしてこれを溶かしてしまおうとし、聖観音の腰を槌で思い切り叩いて潰そうとした。すると聖観音は「あいたた」と叫んだので盗賊は驚き、改心して鶴林寺に返還した。

残念ながら小指の破損について言及しているウェブサイトは皆無。最後の手段と直接、鶴林寺へ電話をした。電話は塔頭の一つ、真光院へ繋がりで、92才になる、先代住職ご夫人が事件をよく覚えておられ、小指のこともテレビの報道にあったと六十年前の記憶を辿って下さった。一件落着。

■ 左の「聖観音立像」画像と「小指を追う」の記述を比べて下さい。手の左右が逆ですが、小説ですからこたわることはないですか？

像の左手は胸の高さにあげて澡瓶そうびんを執り、右手はからだからややはなれて垂らしており、手首に綫帯じゆんたいをまきつけている。その右手の小指がないのである。



「聖観音立像(像高83cm)」 鶴林寺ホームページより